

とってもスペシャルでふつう。

ワークショップのかたち

東京造形大学 小林貴史



これまでゼミナールの活動として、社会における造形活動をもとにしたワークショップを学生とともに様々なかたちで実践してきました。私が勤務する東京造形大学では、ゼミナールが授業としてその履修がすべての専攻領域の学生に開かれています。そのため、私のゼミナールにも毎年デザイン学科と美術学科のいろいろな専攻領域の学生が参加し、活動をともにしています。また、ゼミナールでは毎年履修する学生が変わるため、その年度ごとに活動の内容を学生とともに模索しながら進めてきました。

ゼミナールをスタートさせた当初は、その活動のテーマを「フィールドワークを通じた造形活動の研究」として、その意味ではそもそもワークショップを行うということを前提に活動してきたわけではありません。美術大学というデザインや美術を専門として表現することを日々学ぶ学生達にとって、そこで培った力を社会の中で少しでも還元できる機会を持ちたいという思いからスタートしているのです。それまで学生達は、教職課程における教育実習にみられるように、学外での活動はあくまでも実践の場で学ばせていただいているという立場が中心でした。そのような彼らが、活動を通して少しでもそこに参加した人たちに喜んでもらえたり、感謝されたりする存在なれたら嬉しいなということが素直な動機になっていました。そして、そのことを実現させるための1つの実践としてワークショップの活動を試みていくことになったのです。その過程では学生達の力だけではなく、様々な方たちとの関わりや支えがあって実現してきたことが多くあり、今回はそのことも含めてこの機会をお借りしてこれまでの活動を振り返りたいと思います。

◆美術館における教育普及活動に連動して

当時、美術館がその役割を社会教育機関として、それまでの展覧会開催とともに地域に対する教育普及活動へも力を入れ始めた状況がありました。ゼミナールの学生たちは、すでに先進的に小学生を対

象とした教育プログラムを実践していた公立美術館にて2006年の夏に、学生ボランティアとして参加する機会を得ることができました。ここでは3週間にわたり16のワークショップが開かれた中の1つとして1日の時間と場を学生に委ねていただけることになりました。

学生たちは、自らのワークショップにおいて「つくってあそぶ」「あそんでつくる」というキーワードのもと、活動のイメージを具体化していきました。素材研究を重ねることで、参加する子どもたちへの関わりのあり方にも目が向けられていきました。当日は、午前と午後の2回、それぞれに30人ほどの小学生が参加し、子どもにも学生にもともに充実した活動となる手ごたえを感じ



ることができました。このワークショップの実現においては、当美術館の教育普及担当の学芸員の方の力が大きなものとしてありました。学生の願いを受け止め、実際のワークショップに求められることをご指導いただくとともに活動の多くを学生に任せていただけたことは、学生にとっての大きな学びにつながっていました。今思い起こしても感謝の気持ちでいっぱいです。

◆あらためてワークショップをつくるということ

この美術館でのゼミナールによるワークショップの実施は、メンバーを変えながら3年間続けられました。活動を重ねるごとに成果と課題を見いだすことができ、造形活動を通した学生と社会との関わりについてワークショップの有用性を学生ともども私も感じていました。そして4年目、今年も何ができかなと学生たちと相談していた矢先、活動の場が絶たれ



ます。その年の美術館の企画の予定の中には、学生の活動の時間が設定されなかったのです。それまで3年間活動してきた手ごたえが、ある意味で実施させていただくことが当たり前のように感じてしまっていたこちらの甘えもあったのかもしれませんが。

いやあ困ったなあと学生たちと頭を抱えながらも、次なる活動の場を探すこととなりました。みんなで情報を集めながら、ワークショップが可能な機会や施設をもう一度自分たちの周りから見直すことにしました。そしていくつかの候補の中、ある公立のギャラリーに相談に行くことになりました。そのギャラリーは通常館内のスペースを利用者に貸し出すことを中心として、ギャラリーの企画としては学生によるワークショッ

プの実施はそれまで行っていないようでした。ギャラリーの方からお話を伺う中で、学生たちも何とか自分たちの活動を認めていただこうと必死でした。その結果、ギャラリーからは学生たちにまずは10の活動プランを用意してきてほしいという提案がありました。その上でワークショップとしての実施が可能かどうか、あらためて検討しましょうということです。10のプランと聞いて、はじめ学生たちは尻込みしてしまいましたが、そこでできないと言ったらそれでおしまいです。大学に戻って、ああでもない、こうでもないと思戦苦闘しながらさまざまな活動の可能性を検討して、何とか10のプランを携えてギャラリーとの再度の相談に臨みました。



学生たちの努力の結果、1つのプランを認めていただき、ギャラリーでのワークショップを実現することへとつなげることができました。前年は、すでにワークショップを実施するという機会が用意されたうえで、何を行うかを検討していたのに対して、この年はやっと活動のスタート地点に立てた感じがしていました。

しかし、よく考えてみると学生たちにとってワークショップをつくるということが、造形活動を通した社会とのつながりを模索することを目的とするならば、ゼロから始めてなんとか実施を認めていただけたここまでの過程が、実は重要な意味と大きな学びになっていることに気づかされました。それは、用意された時間と場の中でどのような魅力的な活動を実施したとしても得ることはできないかもしれません。ゼミナールの活動をワークショップとして始めたときの初心に戻ったような気持ちになるとともに、意識しないうちに効率的に活動を進めようとしていたことを反省しました。このころはまだ大学教育においてアクティブラーニングという言葉は表だって聞こえてはいませんが、このような試行錯誤による課題解決の過程があったからこそ、当日のワークショップの活動もより充実したものになっていたのだと思います。また、このことは私自身の学生たちとのかかわりを考える機会ともなりました。ワークショップの活動を重ねていく中で、私の経験知からいつからか必要以上に先回りしたアドバイスを学生に与えていたのです。このことによって学生による活動の可能性を狭い枠組みの中に閉じ込めてしまうことのないように、あらためて自分の立ち位置を確認することになりました。



このように学生とともにワークショップをつくるという活動を通して、多くのことを学ぶことができたことは幸せだと感じています。そしてこの後も大学の近隣の教育普及施設に地域や学校、施設との活動のハ

ブになっていただくことなど、多くの方々の力も借りながら活動の場を小学校や児童クラブに広げて実践を続けていくことになりました。

◆特別な活動から日常の活動へと

ゼミナールでのワークショップの活動を重ねる中で、近年嬉しいことがありました。それは、かつてゼミナールの一員として活動した卒業生が小学校の教員となり、自分が勤務する学校の夏休みの活動にゼミナールを招いてくれたことです。立場を変えて先輩と後輩がワークショップを通してともに活動する姿には、これまで続けてきた活動の成果の一つを感じることができました。先にも述べた多くの方々とのかかわりから生まれてくるネットワークが、学生たちの活動を継続的に展開していくとともに、活動を定型化することなく新たなことに挑戦していく上での手がかりを与えてくれることになっています。

また、この小学校での活動においてひたむきに活動に取り組み、材料に触れたり、そこから発想をめぐらしたりしている小学生とそこに寄り添う学生の姿から、ふと感じたことがありました。これまで学生とともに活動を計画していくときに、そこに参加する人たちにとって普段の生活では体験ではできないことを提供することを



めざしていたように思います。そのことは確かに参加した子どもや保護者の方々に驚きや喜びをもたらし、そのことによって学生自身も大きな手ごたえを感じてきました。それは一つのイベントとして非日常的な体験の場となっていたのかもしれませんが。しかしあらためて、いつものことのように活動する子どもとさりげない態度でかかわる学生の姿に、ワークショップでの活動が非日常なことにとどまらない子どもにとっての生活にある日常へとつながることの大切さを教えられたように思いました。私たちが求めていたことは、特別なこととしてだけではなく、日々の生活の中で子どもたちが造形活動を通して自らの願いを実現させていくことでもあったのです。

今回これまでの活動を振り返ってみることで、参加する子どもにとっての喜びを求めていたことが、結果的には私を含めて学生たちにとっての多くの学びを得ることへとつながっていたことをあらためて確認できました。そして、学生がそのことに気づくことが教育の持つ豊かさと可能性に触れることだとするならば、ゼミナールの活動としての成果もそこにあるのだと思います。